

『青森県史』の窓

65

江戸幕府は主要な河川への架橋を禁じていた。近代以降、各地で橋が架けられ、乾橋も1884(明治17)年

に架橋される。明治期の橋はほとんどが木橋で、乾橋も1884(明治17)年れた。

ところが、それ以後はほとんど修復されず、1955

もその例にもれない。そのため老朽化に伴い、1929(昭和4)年12月に新装さ

れた。下、即死するという痛ましい事故が起きた。

当時は自動車が本格的に普及する前で、馬車が重要な交通手段であった。それ

が心ない者に壊されたりしたが、彼らは熱心に奉仕活動を続けた。

0(昭和25)年頃には橋脚のコンクリートが脱落。欄干が32カ所も壊れていたとい

うから驚きだ。このため1951(昭和26)年、壊れた欄干から視覚障害者が落

下、即死するという痛ましい事故が起きた。

当時は自動車が本格的に普及する前で、馬車が重要な交通手段であった。それ

が心ない者に壊されたりしたが、彼らは熱心に奉仕活動を続けた。

2(昭和27)年、高校生で組織された五所川原赤十字奉仕団の30人が週2回、馬糞

と雑草を除去。赤い羽根街

頭募金を実施して一部の欄

干を修理した。翌日、欄干

橋は竣工。待望の渡り初め

が始まった。そして196

9(昭和34)年8月4日に乾

橋は竣工。待望の渡り初め

となつた。

渡り初めに先立ち、乾橋

架けかえの契機となつた少

年の靈を慰めるため、母親

が花束を岩木川に投じ、関

係者一同が少年の冥福を

祈つた。その後、大勢の市

民が見守る中で渡り初めが

行われた。乾橋は尊い命の

犠牲の上に生まれ変わつた

のである。

乾橋は西北津軽郡の生命

線だ。その後、南側に五所

川原大橋が完成。現在は交

通の要所としての役割を分

かち合つていている。だが、五所

川原・木造・鰺ヶ沢・深

浦を結ぶ国道101号が

重要な幹線道路であること

に変わりはない。大橋に比

べ古く狭い乾橋だが、その

背負つてきた歴史の重み

は、今もなお「西北の生命

線」たる貫禄を備えている。



乾橋の渡り初め 1962(昭和37)年8月・白岩昭氏所蔵

新橋の向こうが旧橋。欄干が崩れ落ち危険な状態だったことがよくわかる。

ゆえ馬糞が橋の両端にたまり、そこから雑草が生えて通行を妨げていた。醉客が落ちて通行人に助けられたこともたびたびあった。改修や架けかえの陳情が相次いだが、戦後復興に忙殺されていた国や県は、とても乾橋の改修まで手が回らなかつた。

中園裕
(県民生活文化課
県史編さんグループ
主幹)

西北の生命線「乾橋」

橋自体の許容重量は14トンなのに、13トンを超える大型トラックが通っていた。すでに橋は危険な状態を越えていた。自動車の激増は橋の老朽化に拍車をかけた。

しかし、度重なる死亡事故と、高校生たちの地道で粘り強い奉仕活動が人心を動かした。まず五所川原商工会議所が市に陳情。市は

橋の老朽化がたまたま橋の両端にたまっていた。そこでから雑草が生えて通行を妨げていた。醉客が落ちて通行人に助けられたこともたびたびあった。改修や架けかえの陳情が相次いだが、戦後復興に忙殺されていた国や県は、とても乾橋の改修まで手が回らなかつた。

しかし、度重なる死亡事故と、高校生たちの地道で粘り強い奉仕活動が人心を動かした。まず五所川原商工会議所が市に陳情。市は

橋の老朽化がたまたま橋の両端にたまっていた。そこでから雑草が生えて通行を妨げていた。醉客が落ちて通行人に助けられたこともたびたびあった。改修や架けかえの陳情が相次いだが、戦後復興に忙殺されていた国や県は、とても乾橋の改修まで手が回らなかつた。

しかし、度重なる死亡事故と、高校生たちの地道で粘り強い奉仕活動が人心を動かした。まず五所川原商工会議所が市に陳情。市は